

町民文芸



只見短歌会

一月詠草

大塚栄一

指導

寒明けも間近と言ふに雪降らず自然も変はる時代が来しか

馬場 八智

新聞の記事にひかれてスクラップ整理もならず月日過ぎゆく

関谷登美子

連れ添ふて昭和の激動歩み来し六十六回の新年迎ふ

渡部ゆき子

囲ひより出でし石南花枝々に数多の蕾かすか膨らむ

目黒 富子

上の孫初めて一人で泊まりし夜下の孫何度も電話をよこす

新国由紀子

降雪の少なき日々の正月の写真を友にスマホで送る

渡部ヨリ子

なが病めば食事の時のみベッドより下りる我が身ぞいつまでつづく

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

二月定例会

目黒十一

指導

山なみも一瞬見せて冬火花
あれこれと種の注文日脚伸ぶ

弘子

心の内語れる友や小正月
現場人背中頼もしや雪祭り

一 恵

寒夕焼子どものたたく木魚かな
薄氷の中にひろがる空の青

恒 夫

滑り止めの毛氈へ歩を雪まつり
祝餅に触れて逃せり雪まつり

礼

読めるけど書けない漢字鳥帰る
ストーブの煮えたぎる湯や誰も来ず

一 穂

雪浅しスノーダンプも置き去りに
旅先に思いを馳せる春シヨール

修 一

日だまりに古老二人の日向ぼこ
日なたぼこ足りたる猫の背伸びかな

吉 児

農道に轍伸びゆく冬早
新雪の中に水木の赤き剪る

幸 生

空の青水ぬるむ那覇海の青
首里城の焼け跡無残春日和

信

二人居の開ぬ大部屋初暦
負けん気の子供の側やカルタ会

都

病窓へ夫の目が向く年の暮
粉雪と首筋に入る夜の風

味代子

